

# 六 花

月刊俳句雑誌りつか  
chairman yamada rokko  
secondary chairman &  
the editor in chief kotori  
designed by little bird

11月号

2008

輪

山田六甲

こ 鯉沈む渦へ初鴨急ぎけり  
こ こほおろぎの震ふるへつつ石離れけり  
ろ 櫓ろを深く入れて時雨の中を漕こぐ  
あ 飽きもせず潮騒しおさいを聴く秋の暮  
て 鉄臭き出湯ゆに浸ひたりをり夕時雨  
に 蕘にらの種指の先にて揉もみ採りぬ  
お オカリナを磨いてゐたる秋灯下  
ら 蝸ろうそく燭そくを敷居に塗りて冬仕度  
ば 芭蕉破れ風も荒すさんで来たりけり  
や 屋根上の種々くさくさ紅葉してをりぬ

お 押し鳴らす 箏<sup>たんす</sup> 箏<sup>す</sup> 風琴<sup>ふうきん</sup> 文化の日  
ら 落成の間 近な 校舎 神の 留守  
む 棕<sup>びく</sup>の木に 手を 当てをれば 冬日 逃ぐ  
は 初霜や 手を 揉<sup>も</sup>んで より 歩き 初む  
つ 月の夜の 落葉に 屈<sup>かが</sup>み ぬたり けり  
し 舌<sup>した</sup>平<sup>びら</sup>目<sup>め</sup> 干し ある 棚に 小鳥 来る  
も 物置の 秋の 灯しに 過ぎし けり  
の 野分<sup>か</sup> 駆け野分<sup>け</sup>の後を 追ひに けり  
お 奥の 間に 通して もらふ 秋祭  
き 着慣れたる 襦<sup>どて</sup>袍<sup>ら</sup>の 綿を 替へらるる

ことり

こ 古こ古こ米まいをいつくしみつつ計はかりをり  
こ 声こゑ噎なれて目覚める朝あした冬ふゆ隣となり  
ろ 炉いろに沸ける湯の音聴いてをりにけり  
あ 天あめ地つちに根を張り枯るる曼まん珠じゆ沙しゃ華げ  
て 天窓てんそうに貼り付ける翅は野ね分のわき後あと  
に 握にぎりしめ皮かわごと嚙かじる林りん檜ごかな  
お 踊おどるかに幹みにありたる蔦つた紅あか葉は  
ら 欄らん干かんを音なく打てる秋の風  
ば 飛ば蝗た放はなちぬ枯れ初はつめし葎むぐらへと  
や 焼芋やきいもとともに新聞紙にまろぶ

お 折り採りしコスモスを挿すランドセル  
ら 蘭の鉢のみの温室冷まじき  
む 斑となり露草覆ふ日の陰り  
は 箸先で味見してより新酒かな  
つ 突出しも箸つけず待つ鰯大根  
し 猪肉の支那竹のごと余りたる  
も 木犀の乾き尽くして零れけり  
の 野の果を探るごとくに秋の風  
お 音高く石打ち付ける月の湖  
き きしきしと猪肉噛んでをりにけり

# 伸びるだけ伸ばして蛸を干しにけり 松下幸恵

虫籠に蝉の亡骸なきがら残りけり

今朝も又朝顔咲いてをりみたる

虫籠に野の花詰めて帰り来し

逝ゆく夏を惜しみながらに孟蘭盆会うらぼんえ

のびるだけのばしてたこをほしにけり

「継続は力なり」という言葉がびつたりの松下幸恵さんに惜しめない拍手を送りたい。六花創刊以来重病のほかはほとんど休むことなく出席。その謙虚な姿勢の成果。

掲句には人間の智慧と欲を、漁師の蛸を干す作業を通して惜しみなく詠み込んである。干し蛸を作る時、大きく見せるため「伸びるだけ伸ばして」いる。蛸が破れて商品価値がなくなる限界を知悉している漁師に感心しているのだ。

# 風を選び南部風鈴鳴りにけり 筒井八重子

蛸<sup>たこ</sup>踏んで蛸の逃げ出す魚<sup>うお</sup>の棚<sup>たな</sup>

涼しさや朝に残れる白き月

両の手を父にゆだねて初泳<sup>はつおよぎ</sup>

浮袋<sup>うきふくろ</sup>放さず海に遊びをり

かぜをなんぶふうりんなりにけり

主観写生の句で、南部風鈴の風格をよく表現している。南部風鈴はすべての風に鳴るわけではない。風を選んではか鳴らない、という捉え方が独創的で、また寓意性（それとなくある意味をほのめかす）があり、南部風鈴という物（重厚さのイメージを感じさせる鉄）に語らせたのも佳い。南部風鈴が選んだ風に鳴ったときには、きつと涼やかなことであらう。

# 麦秋や女は家で飯を炊く

久永 つう

位置違へ若葉の城を仰ぎけり

鵜飼果て川には闇の残りけり

荒梅雨や夜の枕を打てる音

紫陽花の紫はじく雨滴かな

ばくしゅうやおんなはいえでめしをたく

名句の条件の一つに「覚えやすいこと」がある。調子の整った掲句はその条件を十分に満たしている。麦の熟れる頃男はむしむしとした田畑で農事に忙しい。主婦は一足先に家に帰って、夕飯の仕度をする。飯炊きはその営みの一つに過ぎない。風呂を焚いたりその他様々の家事をこなす。そのことを含んだ「麦秋や」であり「飯を炊く」なのである。もし「麦刈や」と夫の様子を限定していたら掲句は小さな句になっていた。



団扇よりこの世の風の暑さかな 菊谷 潔

雲一つ祈り出せぬ暑さかな

ひぐらしや心細さはご同様

松風を煎じ詰めれば蝉しぐれ

孟蘭盆会胡瓜のとげの痛さかな

うちわよりこのよのかぜのあつさかな

生きている実感を団扇の風に見出している句。寒さ暑さに堪えるのも生きている証拠と、団扇で煽ぐ。しかし団扇から来る風に涼しさはなく、風そのものが暑いというのである。気温が体温を超えると、風に涼しさはなくなる。煽げば煽ぐだけ暑さはつる。そのいらだちさえも、前向きに転嫁して瓢々としている姿が見えてくる。

軽やか且つ古典的な表現が個性的。

# 六花集

六甲選

平井 滯子

相寄りてのち競ひ合ふ滝の水  
水音に足を速めて登山の子  
日焼せる腕にからめ青ザイル  
炎帝の使徒めき尾根を伝ひけり  
砂浜の砂に身を埋め原爆忌

松本 容子

棘よけて薔薇の満ちたる寺をゆく  
氷菓舐め古刹巡りをしてをりぬ  
枕辺に蚊取線香の漂ひ来  
渡さるる時に線香花火落つ  
燃えつきしのの字の灰や蚊遣香